

ヤシャ《落ち着かないさま》滋賀]

ヤットカ (ス¹ットカ) ☆ [副] 《やっと, かるうじて, 口語・ヤットコスットコ》「ジ
モグリマメの取り入れ〜終えた」[ヤットカット 鹿児島・沖縄県八重山, ヤット
カメ《久しぶり》岐阜・愛知・滋賀県石山]

ヤッパ¹ (シ) [副] 《やはり, 口語・ヤッパシ》「呼ばったどもヤッパ来なィ」[「や
っぱし懲りねへのさ」洒落本『深川手習草紙』]

ヤ「デモカ, ヤデモ (カデモ) [副] 《どうしても, 無理にでも》「〜カデモさつき
《田植え》にかたせろ《仲間に入れてくれ》って聞かなィんだわ」

ヤバシ, ヤバシ [副] = ヤッパ(シ)

ヤリムリ [副] 《無理矢理》「〜立ち子《その年巣立った小鳥の子》おぼくれろって
やかーましめて」

ヨ¹ォ [形] (イィ) 《よく, じょうずに; しょっちゅう》「あんまし案配〜なィ」

ヨ「ォイ・ニ [ナ形] 《=標》「この期《最近は》ぜにもォけも〜デナィ」[標準語と
同じだが, 日ごろさかんに用いるので, 越後らしい特色のある語として採録。]

ヨ¹シカ ☆ [副] 《よしや, もしや; あるいは, それよりも》

ヨック¹リ・ト [副] 「〜だ¹よさま《神主<太夫; 津軽から鹿児島まで全国で》ほんに
ヨー〜ックリ祝詞あげてなさるわ」[/yu/~/yo/交替の例; ヨンベナ, ヨビ《指》
東北・群馬・長野など]

ヨッタ¹リ [数詞] 《=標・やや古い言い方, 4人》

ヨッバラ¹ (・ニ) [ナ形] 《充分すぎるさま, もうたくさん, あきあきした》「きらず
ばっかしくて《食べて》〜だ」「おめさん(おまエサン)のまんぱち《いい加減な
こと, 間抜けぶり》わ, もオは〜になった《もう御免だ》」[福島・関東・岐阜県
揖斐郡・石川]

ワ「キタマ カラ ☆ [名+助詞] 《横合いから》「〜とっぺつもなィおと《突拍子もな
い声》立てらって耳聞こえのなったがね《聞こえなくなったじゃないか》」

ワ「リト [副] 《=標・口語, わりあい》

ワ「リカタ, ワ「リカシ [副] 《=標・口語, わりあい》

ワ¹リドモ [形] (<ワルィ・ドモ) 《=標・わるいけれど, すまないが》「〜あとお
かたしといて《片付けておいて》くださィ。せばまた《それではまた》」

* * *

* 1986年3月急逝された本学外国語科主任・故大窪愿二教授にささげます。先生は新発田市の西南, 北蒲原郡村松町の方で, 毎年拙論にお目通し下さいました。ご冥福をお祈り申し上げます。
(Takeba Ryooiti 1986.9)

マよ「ろォたことー《飯を よそったもんだ》」

ビ「ヨラビヨラ・テノ・ト [副] 《病弱なさま》 [《標》ヒョロヒョロか]

ペロ (ペロ)「¹・ット [副] 《ぼんやりと》 [cf. ペロナガイ 《ひょろっと背が高い》

新潟県西頸城郡・静岡, ヘロヘロ《空腹なさま》愛媛]

ペロ (ペロ)「¹・ット☆ [副] 《すっかり, ころっと; =標・ペろりと》「～ト忘れてた」

ホド¹ント [副] 《=標・ほとんど》越後・東北で, 語中濁音化しない人にもこの発音が見られる。

ホズホズ¹・テノ・ト☆ [副] 《しみじみと》「いとしげな子ども^{かた}の様子お～ト見ていた」

ホ¹ニ [hoũ(:)ni, hū:ni] [副] 《ほんとうに, 全く》「～何もかまわのて《おかまいもせず》すまなィえす», 《(相づちとして, 鼻から息と声をひびかせて)そうそう, ええ》「フンニ¹サ, さーみ《寒い》晚げだ」[埼玉県秩父・中部・西日本, 「本にうしろつきのしほらしき所が…」(世間胸算用)]

ホ¹ンノコテ (<ホンノコトエ) [連句] 《ほんとうに》

マズ, マ¹ンズ [副] [間投詞] 《=標・まず, そこでまあ; それではまた, さようなら》「マンズハヤみんなしてオ¹シンメサマ《神明神社; むかしの運河輸送の護り神》に行きましょて」「したらば～」

マズノ ハ¹ナシ [連句] 《まず第一に, なにはともあれ》

マ¹ット [副] 《もっと》「～ちかま《近く》に寄ればいィさ」[宮城・群馬・千葉・愛知・山口]

モ¹ォハ, モ¹ォハヤ, モ¹ォハイ (モ¹へ) [副] 《もう, もはや; もう二度と》「～ニドマメ《サヤエンドウ》わ採られるろ《採れるだろう》」「我慢してたっただも モー¹ハィだーめだ」「～わるさわ致しません」[モーハ 宮城・千葉, モーハイ 彦根]

モ¹ッコモコ・テ☆ [副] 《着ぶくれるさま, もこもこして》「～テいっぱィこと着込んで歩かんなィぐらィダ」

モ¹ッタラ ク¹ッタラッ・テ☆ [副]

ヤ¹(ッ)キ ヤキ・テ☆ [副] 《やきもきして, 気が気でなく, 待ち遠しくて》「いっこ《一向》だーっても来なィもんだすけ, おっかさま～テいなった《やきもきしていらっしやった》」

ヤ¹「シャクシャ・テ☆ [副] =ヤッキヤキテ [ヤシヤシ《精を出して》千葉, ヤシャ

- ト「タラポタラ・テ☆ [副] 《とぼとぼと歩くさま》「ととさ《父さん、おやじさん》
田なぼ《田んぼ》のほゝに～テ歩いてなさったっけが」
- ト「ットト☆ [副] 《足早に》「～あんべや《歩いて来い》」[「とっととお行きやれ」
(狂言『萩大名』) < [形] 疾く疾く]
- ト「ッパズカ・ニ [名+助詞] 《偶然, ちょっとした間に》「～ニころんでしもた」「～
ノあゝまち《一瞬の過ち》」[《間一髪の幸運, ぎょうこう》新潟, トップズケ《過
失, はずみ》西蒲原郡・秋田・山形]
- ト「ロ(ッ)ベツ [副] 《しょっちゅう, いつも》「あんじょさま《庵主様, 尼僧》わ～
お経ばよんでなさる」[トロベツ 南部・山形など東北, トロッベツ 岩手・越後,
トロッペシ 秋田県鹿角郡, トロペシ 新潟県古志郡, トロッピーョー《たびたび, い
つも》群馬など関東・長野]
- ド「ンゲ・ニ [副] [ナ形] 《どのように》
- ナ「シテ [副] 《なぜくなに・して》「～雪降りまゝに雪おろし《雷をともなう突風》
来るんだろかね, 越後の七不思議ってども《というけど》」[東北・奈良県吉野郡・
西日本・対馬でも用いる]
- ナ「ジョ・ニ (カ) [副] 《どんなにか, ほんとうに》 = ナジョモカ
- ナ「ジョ・ニモ [副+副助詞] 《どうに(で)も, なんとか, なんと》「～ニモなん
なゝほど, 暑さにチャベツ [k ambetsi] 《キャベツ》の葉っぱがやじれてしもた」
[ナジョ・ニ『仙台浜荻』・東北・長野県下水内郡, ナンチョ 長野県東筑摩郡]
- ナ「ジョモ [副+副助詞] 《どんなにか; どうぞ》「新発田の雪下ろし《屋根の雪を掘
って落とすこと》ナジョモカ容易でなゝことか」
- ニ「ヤニヤ [副] 《腹具合がわるいさま》「腹～シテやめ⁷て《痛くて》どしよ⁷ば《どう
しようか》」
- バ「カ(・ニ) [名] [副] 《=標・ばかに, やけに》「きんのわ《きのうは》バーカ早
おからニドイモ《ジャガイモ; 岐阜など全国で》の手入れしてたねす」
- ハ「ヤ, ハァ, ハィ, ハ [副] [間投詞] 《もう, もはや, 全くのところ, 実際; 間
投詞として「ね」「さ」のように随所にはさむ話し方はザ⁷ィゴポォ(いなかっぼく)
聞こえる》「ほゝす, おまゝさん, 毛糸が, もうハィうんだかって《もつれて》ハ
ァ, なじよもならないてば」[ハー 東北・関東・山口など<「早や」か]
- ヒ「(ソ)ド, ヒンデ (ヒンドィ), ヒット {加治}, ヒンレ {豊栄} [形] 《ひどく,
たいへんに》「ヒンデ遠こゝとっから新発田まで潮鳴り聞こえて来るときあっさ
《聞こえることがあるんだよ; 【注】越後七不思議の一つ》」「ヒンドふつつマ⁷

タ「ンダ [副] 《ただ, たった》「～1回しか縄跳びにかたして《仲間に入れて》くんないなんて」[「たんだ弱りに弱り」(謡曲『隈田川』), タダの強め; 市内中心部には濁音の前の撥音化はないが, 近隣の越後北部は東北と同じ鼻濁音化があり, その影響も考えられる。]

チ「ツチャゴ」オ☆ [形] (チツチャコイ) 《ちっちゃく, 小さく》「ちょっとばっか声～してはなしなさいて」「んだてば《そうなんだよ》, みばわーるて《かっこうわるくて》～なってたさ」[《=標・口語, チツチャイ<チヒサシ》日本の子どもの発音や方言の [tʃa] 音は古代語サ行音 (佐・左・草など) の名残りか。韓国・中国の子どもは /sɑːtʃa/ が区別できる。]

チ(ツ)ト(バカ)☆, チョ「ットバカ(シ)☆ [副+副助詞] 《=標・口語, チ(ヨ)ットバツカリ》「そーっても《それでも》～おら¹せつーな¹ィネ《私つらいわ, 残念よ》」

チ「ピラチピラ」☆ [副] 《ちびりちびり, 少しずつ》[チビリタラリ《ひまを見て少しずつ》群馬県多野郡]

チャ「ツチャト」☆ [副] 《ちゃんと, きちんきちんと; さっさと, 早く》「～せやね《することは, ちゃんとしてね》」「～雪こぎ¹て あべ《雪を踏みこえて歩いて来い》」[チャット《早く》志摩(国誌), 古語チャ(チャ)ト《手早く》「うき事はいく度も我心にちやちやと帰るもの也」(正徹物語, 15世紀中ごろ)《きちんと》「節ト云ハ……チャチャトーテマリ落シタリセイデアルゾ」史記抄 1477,]

チョ「チョクチョ・テ」☆ [副] 《早口で, 上っ調子に》「あのしょ(あの人)話じー～チョチョクチョーッテ《～と言って》何がわかるばさ《わかるもんかい》」[cf. チョチョククル《ばかにする》和歌山, チョチョクラカス《かかう》熊本]

チョ「チョ」ラ [副] 《いい加減で; ちょこまか, 落ち着きなく》

テ「ンデ」 [副] 《=標・全く, なんにも; 打消・否定的表現をとこなう》「雪かがーっばて《まぶしくて》テーンデめ¹な¹ィ《みえない》」「～だーめ¹だ」[テント・テンニと同源か。共通語の口語的表現や群馬などで肯定的に《非常に》「～いい」]

ド「ォ」 [副] 《=標・どう》「スキィですべろた¹って～しょもな¹ィほど, やわか¹ィ雪だわ」

ド「ォセ・コセ」☆ [連句] 《どうせ, なにをした¹って》「どこ いっろ¹ォても《いじって直しても》～古い家だ」

ト「ゼン・テ」 [ナ形] 《することもなく退屈なさま, 徒然》[「留守番のトゼンサ遠い昼花火」(仙台弁句辞典), 『仙台浜荻』・秋田・山形・福島, 《空腹》愛知県北設楽郡・静岡]

こないのご飯)になるろ」[古くはジョォヤとも言った。盛岡・仙台・越後・長野
県佐久・関東など。《必ず、ぜひ》庄内・青森・岡山・広島など、《平生、たびた
び》愛知県中島郡・北陸・兵庫・愛媛・香川]

ジョ「オノキ ニ ナ ッテ☆ [連句] 《いい気になって》「～いたらお茶ばみんなま
かして《ひっくり返してこぼして》しもた」

ジョォヤ [副] → ジョォシキ

ジンギナシ・ニ [ナ形], オジンギナシニとも。《遠慮なしに》「～いただきますよで
[<仁義。《遠慮》秋田・山形・関東・静岡・富山, 《交際》山梨, 《贈答》広島
・島根]

ズラクラ [副] 《ぬるっと, ずるずる (気持ちのわるい感じ)》

ゼンゼゴ¹・ニ☆ [名+助詞] 《順に》「おしかもって《おしくらまんじゅう》でなィっ
てば。～ニ並んで待ちなさいやね」[<順々子か]

ゾオサモノ¹オ, ジョオサモノオ [形] (ゾオサモ ナィ) 《しごく簡単に, 造作なく》
「ざ¹っく《お手玉》みつつばかしなん, ～でーぎ¹るー」[<造作もなく]

ソツツケ (ニ) 《そんな; そんなふうに》「まーった《復》～ニあっちゃぶって《こば
かにして》, ぶつど《なぐるぞ》」

ゾロゾロ¹・ニ☆ [副] 《液体をなみなみと注ぐ》「お茶～ニ入れてー, そってわ《そ
れでは》まかして《こぼして》しもォがね」[ゾロッペー《いい加減: 関東・富山》,
ゾロゾロ《不ぞろい: 美濃》とつながるか]

ゾ¹ロビ (ッ)ゴ・ニ [ナ形] 《不ぞろいなさま》「靴下～ニはいてる」[ゾロゾロ (美
濃), ゾロビク《引きずる: 千葉・大分・対馬など》]

ソ¹「ンゲ・ニ [ナ形] 《そんなに, そういうふうに》[ソゲーニ 愛知・三重・山陰・
対馬, ソゲン 島根・九州, ソガイニ 山形県米沢・近畿・中国・九州, ソガーニ
近畿・中国]

ソ¹「ンマ [副] 《じき; ほんのすぐ…》ソ¹「ンマ ソコ「おらとこ《私のうち》わ～そ
こだ, 寄って行き なれ」ソ¹ンマ サ¹ッキ(ナ)「～さっきな, 着いたばっかだ」[出
羽・越後(増補俚言集覧)・東北, ソ¹ンマニ 熊本, ソ¹ンマン 熊本・福岡, ソ¹
ンマナ 宮城, 「ヒンノメェは《昼前は》掃除洗濯でソ¹ンマ過ぎ」(仙台弁句辞典),
ソ¹ンママ『仙台浜荻』・筑後『久留米浜荻』<ソ¹ノママ, 「そのまま《すぐ》取り
て奉りぬ」(仮名草子『浮世物語』1665-66刊)]

ダ「フダフ・テノニ☆, ダ「フエダフ・テ☆ [副] 《着る物が大きすぎるさま「だぶ
だぶ」に体と空気の動きを加えた感じ。》「帽子が～テテ《として》ぬげそげだ」

《ぞんざいに扱うさま》徳島，その他の意味に用いる。]

ゲントニ [副] 《たちどころに，即座に》「薬〜よ効いたわー，ほんにさ」[《てきめん》越後・富山・長野県下伊那；《実に》山口。＜古語ゲニ]

コ「ッタマ☆ [副] 《しこたま，たくさん》

コ「ッチャバカ [副] 《これぐらい；これっぽっち＜コツツケ・バカシか》「〜のことなん，く「たまになんない《苦にならない》」

コ「ツツケ (ニ) [連体詞] [副] [ナ形] 《こんな；こんなに，コンゲニより ややらんぼうな感じ》「コツツケじゃまくさい仕事，しとゝもなゝいわね」[コンツラ(ナ)石川]

コノキ，コノキリ [名] 《ちかごろ》[コノキリ 群馬]

コノカミ [名] 《さきごろ，せんだって》

コ「ンゲ (ニ) [連体詞] [副] [ナ形] 《こんな；こんなに》

サ「ッキナ [名] [副] 《さっき，さきほど》「そんま《ほんの》〜まで雪降ってたつたが……」[全国方言辞典に中魚沼郡とあるが，下越でも言う。岩手・仙台・福島県相馬]

ザ「ラモ (ッ) コ・テ [副] 《ざらつくさま，ざ「らざら》「口ん中，砂で〜テ」「〜テぞけ雪わ《ざらざらの溶けかけの雪は》すべりやすって歩きづらゝもんだわ」

ザワザワ・テ [副] 《寒気・悪寒がするさま；＝標・ザワザワスル》「夕されなつと《夕方になると》背中が〜ッテして熱が出たがんだ《出たんだ；ガンは豊栄町・佐渡などの準体助詞，新発田ではノまたはン。》」

サ「ンザッバラ☆ [副] 《さんざん，ひどく》「〜待たさつた《待たされた》」「あつつけなこと〜言われて，ごっせやける《腹が立つ》」

シ「カモカ☆，シ「カモ [副] 《かなり，だいぶ》「外がシーンとしてっすけに《しているから》見たれば，シカーモ(カ)雪降ってたつた」「これ〜いゝねっか《いいじゃないか》」

シクラ モックラ☆ [副] 《まごまご，もぞもぞ》

ジ「ネント☆ [副] 《自然と＜「然」呉音ネン》「加治川^{かじかわ}で水あびしてたれば〜うも〇《上手に》なつた」[ジネンニ 岐阜県郡上郡；中世まで《ひとりでに》はジネン・ニ/ト，「昔よりころざしあれどじねんに怠る」(宇津保物語)]

ジャ「シジャシ・テ [副] 《砂などがまざって気障りなさま》「廊下歩くと〜テて気持ちわーり」

ジョ「オシキ [副] 《たぶん；きっと》「こつてわ《これでは》〜めっこまま《炊きそ

オジ⁷ンギナシ・ニ [ナ形] 《無遠慮に》 → ジンギナシ・ニ

オッカナ ビ⁷ックラ ☆ [副] 《おっかなびっくり, こわごわ》

オッキョ⁷, オッキュ⁷ [形] 《大きく》 オ(オ)キョ⁷, オ(オ)キユ⁷とも。「うらさき《先端》にちょこっと付いたつぼみ, ~なって花になった」 [《=標・口語, オッキイ, オッキナ》]

オモッシャ⁷イフウ・ニ [形+名] 《おもしろい形や言い方に; 愉快的な言い方や様子で》
「かきもち焼いたれば形が~ニふくらがった。」形容詞「オモッシャ⁷イ」の連用形オモッショ⁷は「オモッショ⁷な⁷イ《楽しくない, 不愉快だ, 別におもしろくもない》」のように気分を表す場合によく使う。

ガット⁷ニ [副] 《ぎゅっと, (物理的に) 力を入れて, 強く》「~はたくなやれ《たたくなよ》」「雪玉ばガー⁷ットニ固めて, 一晚塩まぜた庭の雪んなか⁷いけて《埋めて》次の日に取り出した, ほんにか⁷った⁷イ石みた⁷イだ雪玉おば「てんか」てゆ⁷。子供だ⁷イ《たち》わそればぶ⁷つけ合⁷って天下お⁷きそ⁷す⁷け, そんげな名が⁷つ⁷いた⁷ろが⁷ね《付いたのだろうと思う》」 [《非常に, 大層》飛騨・尾張, ガト⁷ー《非常に》中部・三重・愛媛・大分, 《強く》茨城・群馬・新潟西頸城郡, 《頑固》埼玉県秩父 (cf. 新発田でガンド)]

ガッパ⁷・ト/テ☆, ガッパ⁷リ(ト)☆ [副] 《ごっそり, がっぼり; 大きく欠けたり, 急に増えたりしたさま》「か⁷まいた⁷ちに足おガッパ⁷テ切⁷られた⁷ども, 血⁷イ出⁷な⁷イか⁷った⁷さ」「か⁷「ねガッポ⁷リも⁷オ⁷かった」

キ「ノナ☆, キ「ンナ☆ [名] [副] 《きのう》接尾語「ナ」はヨンベ⁷ナ・サッキナ・イマシ⁷ナにも付く。「朝な夕な」のナと同じか。

クタイ⁷・ニ, クタ⁷「マ・ニ☆ [名+助詞] 「~ニ スル, ~ニ ナル」の形で《苦にする(なる) 気にする(なる)》。

ク⁷「ツタイ⁷・テ [ナ形] 《退屈する, 憂鬱だ, 鬱々とするさま》「毎日~デ⁷ど⁷し⁷よ⁷も⁷な⁷イ⁷て⁷ば《しかたがないよ》」

ク⁷ツチョ⁷ [形] (←ク⁷ツチャ⁷イ) 《満腹のさま, <口語・くちい; 腹がもたれるさま》
「ク⁷ツチョ⁷オ⁷テ も⁷オ⁷は く⁷わ⁷ん⁷な⁷イ」 [ク⁷チ⁷イ『庄内浜荻』・宮城・関東・長野, 《きゅうくつ》群馬県碓氷郡, ク⁷ツ⁷イ《呼吸が苦しい》愛媛, 《だるい(子ども)》松山]

ケ⁷「ソケソ⁷・テ/ト [副] 《生气・油っけのない感じ》「病気で~テ⁷声⁷して⁷た」 [標準語では《反省などせず平気でふるまうさま, けろっと》の意味のようである。方言で《落ち着きのないさま》福岡県博多・大分・対馬・島根, 《ためらうさま》京都,

イ¹カ¹イ¹カ・シテ☆[自]《肋間神経痛などで痛くて》「このあばら骨のあいさが～シタ感じにヤメル《痛む》。》」

イ¹カ¹ツ¹ト☆[副]《体の一部に急に痛みを感じるさま》「いやーィや、わきっぱら～トスルもんで、かがんで《しゃがんで》しもたてば」[古語イカ(イカ)シ《厳し》, イカツイ・イカチイ《気が強い》(千葉), イ¹キ¹ド¹ォ¹リ《胸の神経痛で行きが止まるほどになること》(新発田), イ¹キ¹ド¹シ¹イ(息苦しい)(若山・近畿・徳島)のイ¹キ(息・生き)とつながるか。]

イ¹ッ¹コ¹〔オ〕(ニ)[副]《=標・一向に, どうしても～ない》標準語と同じことばだが, 新発田方言ではよく使う。「今年わ, は, イ¹ッ¹コ¹春になんなィね」

イ¹ッ¹チャ[副]《いちばん, 最も(←一番)》「よ¹ォ¹ベ¹な《昨夜》～先に寝込んでしもた。」「階段のイー¹ッ¹チャ上から落ちてト¹ォ¹シン¹カ¹イ¹タ¹わ《体じゅう痛むよ》。》」

イ¹ッ¹パイ¹コ¹ト☆[副]《=イ¹ッ¹パイ, フットツ; たくさん》「ハザ《稲木》の稲にイ¹ナ¹ゴ～たかった」

イ¹マ¹シ¹ナ[名][副]《たった今》「たんだ～まで待¹っていな¹った《いなさった》んだどもね」[「ほととぎす鳴きて越ゆなりイ¹マ¹シ¹来らしも」万葉集4305; イ¹マ¹シ¹ナ, イ¹キ¹シ¹ナ《=標・行き掛け》のシも強める副助詞か。]

ウ¹ジャ¹ウ¹ジャ¹〔テ〕[副]《=標・たくさん集まってうごめいているさま》「土橋の下, ウ¹ル¹メ¹ッ¹コ《めだか》～テい¹ん¹ね¹ッ¹か《いるじゃないか》, たまげ¹た¹さ」

ウ¹ニ¹ャ¹ウ¹ニ¹ャ〔テ, ニ〕☆[副]《傷が膿んでくずれているさま》「あかみどこ《赤くむき出しの傷》のまわりが～ニ¹な¹って, やめる《うずくように痛む》」

エ¹ラ¹ィ, エ¹レ¹, エ¹ロ¹[形][副]《=標・えらく, とても, はなはだ; 疲れる, 体がつらいさま》「今夜わエ¹ー¹ラ¹ィおそ《おそく》まで仕事だったェす」「エ¹ー¹ロ¹つかれたてば《疲れたよ》」[エ¹ラ¹ィ《はなはだ》大坂『難波聞書』, 会津・岐阜・愛知・山口・宮崎など。ドエ¹ラ¹ィ[岐阜でdoe:ræ, de:re:]近畿・岐阜・愛知; エ¹ラ¹ィ《苦しい》岩手・中部・近畿・中国・四国]

オ¹ォ¹キ¹ニ[感動詞<副]《ありがとう》「オ¹ォ¹キ¹ニば¹や《どうもありがとうございます》」[=オ¹ォ¹キ¹ニ(京都), 山形・愛知・三重・長崎県松原など]

オ¹ォ¹バラ¹・ニ☆[ナ形]《(家の中が)散らかし放題のさま》「い¹ィ¹《家》んな¹か～デ, おしよ¹ォ¹し¹だ¹てば《恥ずかしいわ》。》」

オ¹カ¹シ¹ゲ¹・ニ[ナ形]《=標・変なさま》「お¹め¹さん(おま¹ェ¹さん)《おま¹え, きみ》がわきたまからチョ¹ォ¹シ¹タ¹レ¹バ《い¹じ¹ったものだから》細工がオ¹カ¹ー¹シ¹ゲ¹ニ《機能・形などがだめに》なったがね《なったじゃないか》。》」

- (*) ほかの方言や古典語における類似の語形の例を [] に入れて示す。
- (ク) アクセントの型の種類は東京方言と同じ。平板アは2拍目のまえに [「」] を置く。そのほかはアクセント核（下がる場所）に [「」] を置く。例文にも必要に応じてアクセント符号をほどこす。

☆●×○▽☆

アイサ⁷・ニ, アイサ アイサ⁷・ニ, アヤマ⁷・ニ [名] ((空間的)あいだに, 中間に; (時間的)合間に, 合間合間に; 時に)「戸と壁の～にはさまって取れ～ないわ」「このごろ顔見ないども, ～ニワこいばいいさ《時には来ればいいよ》」[《あいだ》東京南多摩・岐阜・京都府・熊本県五木など, 《あいま》静岡榛原郡・奈良県・香川など, 《時に》伊豆大島・近畿・四国など, 《ひまひまに》愛知南知多・四国・壱岐] アイマ・ニ, アイダ・ニも使う。いずれもアイ<アヒ' aFi《間・合・相<アフ》に場所を意味するサ [古代音価 tsa~tʃa], タ [ta], マ [ma] のついた語で, 東北・関東の場所格の助詞「サ」にもつながるものではないか。(アイヌ語の場所を示す格助詞 ta も (偶然か) 似ている。「さっぽろ た あん。」《札幌サ在る》)。

ア「オノケ (ダマ)・ニ☆ [ナ形] 《もろにあおむけに》「～ニほげころんでしもた《びっくりかえってしまった》」[「罪人を取てあおのけにふせ」『大平記』2, アオノケ ^{くびき}頸城郡・北海道, アオノケ 津軽・福島, アオヌケ 近畿・伊予, アオンケ 千葉・島根, など]

アカアガ⁷・シテ☆ [動]

アジカケ⁷ノ⁷ォ (シテ) ☆ [形] 《偶然にも, 思いがけず; うっかりして》

ア「ッたら [副] [連体詞] 《せっかく価値あるものを, 惜しくも, 大切なものを》「～大事なものをば のォなした《なくした》」「～もんだすけ《大切なものだから》やられろおば《あげられるものか》」[「言をこそ菅原といはめ, あたら清し女」古事記・下, アたら 沖縄, アッたら 岩手・長野・埼玉・喜界島など, アッたらモノ 岩手・関東・北陸・近畿・佐賀; 古語アタラシの語基] アツケ [ナ形] 《あんな, あんなふうに》(ア(ン)ゲナより乱暴に感じられる。)「～ダ人, モハ 《もう, もはや》顔なん見ともないて。」

ア「(ン)ゲ・ニ [ナ形] 《あんなに, あのように》「お⁷んちやが《弟が》～ニ難儀して⁷っすけ, 手伝⁷てやれ。」[指示副詞「ア」に有り様を表すケ・ゲ (朝鮮語でも jərah-^ケge (<kəi) 《あのように》, nóp-^ケge 《高く》), ; (ン)ゲ 山形・新潟・宮崎・山陰・大分など, アゲイニ・アゲーニ 九州・愛知・千葉など]

べてっと、人に説明してても自分だけに考えてても、口ん中も頭ん中もシバタ弁（ざいご、つまり周辺地域のオトで言えは「スンバダ弁」）で ふとつ になってしても、標準語に言くと ゲツバタ しそげな気がすんだねす（《するのですよ》）。ほんに「地方の時代」の思想わ、いろーいろな文化の複合体としての日本をまっと越後平野の稲穂みたィに豊かにすんもんで ないろかと思ひますどもねす。

遠い地方の衆方わ いったか《いっこうに》わかりなんなィかも しらなィどもやでもか《無理矢理》ひんどィふとつ 副詞ば交せてみました。勘弁しておくんなさィやね。アンダラインをつけとつ ことに いたしましたてば。

この夏帰郷（「帰芝^{きし}」という）した際に書店で野口幸雄編『新潟方言と古語』を見つけ、早速購入した。国立国語研究所新発田地方研究員でいらっしやる野口氏のご本からも、忘れていた（ワースレタッタ）ことば、拾いおとしていたことばをおことわりなしにお借りした。1979（昭和54）年初版発行の『新潟方言と古語』を拝見しないままでいたことが残念である。わからずにいたこと、模索をつづけていた問題について、教えられることが多い。俚言には一つ一つ世代差までそえてあるので、新潟県における現在の言語状況が把握できる。「●壮年が知らない語、×青年が知らない語、○壮年が知っているが使わない語、▽青年が知っているが使わない語」というわかりやすい分類である。

* * * * *

方言の表記、発音については「雪かがーっぽて」「雪こざいて あべや」参照のこと。

- (ア) 「ナイ」は [ナエ nai, naə] または [ネ ne(:), ne(:)] と発音される。
- (イ) 見出し語のうち、アンダラインをつけた音節は、強調表現において長く、かつ、高さの調子を変えて発音することがある。例文中では「ー」で表記し、本来の重母音「オォ、イィ」などと区別する。例：オ「ォバラ」・ニ → オ「ォーーバラ」ニ。
- (ウ) ☆印は『全国方言辞典』『標準語引分類方言辞典』の見出し語にないことば。
- (エ) おおよその意味を（ ）の中に示す。（＝標）は標準語での意味と同じか、あまりちがわない場合。
- (オ) 副詞以外の機能をもつものには品詞名を略語でそえる。[形] 形容詞，[ナ形] 連体形ナ・ダのつく体言型形容詞（形容動詞語幹），[動] 動詞。
- (カ) 「 」の中は新発田方言の例文。

イイ・(ヨ) 《よい》→ あんば¹イ ヨ¹て 《調子がよくて》

オモッシャイ・(シヨ) 《おもしろい；うれしい》→ オモシヨの¹なったてば 《おもしろくなかったんだよ》

コワイ・(ウォ・オ) 《おそろしい，こわい；かたい；体がきつい》→ 腰がコー
ーウオ¹て

7-1) 爺さが……畑ぶちしていたと。年いって《年とって》なかなかこおで、
いっばいぶだんの《たがやせなく》なったでね。(『しばたの昔話』菅
谷, p.2)

ナイ・(ノ) 《ない》→ 大事だものが¹なった 《なくなった》；¹なさな¹イよ¹に
《なくさないように》気¹つけなさいやね

ワルイ・(ル) 《わるい，いやだ；恐縮だ》→ ほんにワールおもわな¹いでねす
《わるく思わないでください》

§ 4. 新発田方言の副詞および副詞的表現

形容詞に入れていいもの，たとえばエーライ 《えらく，たいへんに》，ヨ¹オ 《よく；しゅっちゅう》など，また形容詞的体言（形容動詞）であるヨ¹オイ 《容易，簡単》やゾ¹ロビコ 《不ぞろい》も，新発田方言では副詞的につかう頻度が高いという理由から，ここに本来の副詞といっしょに採録する。

オーキ¹ニ 《たいへん，ありがとう》の語尾「ニ」のように取り外せない要素はそのまま見出し語とするが，ヨッパラニ 《もう充分すぎるまでに》は，ヨッパラダ，ヨッパラデ，と，ほかの付属語もつけられる場合は，「・ニ」とする。「ト」「ッテ」（『しばたの昔話』では多く「で」と表記）も同じ。）

* * * * *

ちとばかり，この辺で，ショオズン（標準）語でな¹イ言い方でシバタの言葉のことをば書¹てみよ¹かと思¹いますども，ど¹オでありましょかねす。やっば，論文でもんわ漢文（カーンブン）だのラーテン語だの，ショズン語だのに書かな¹いばなんな¹イて，先入観念が有¹すけに，いっこに読んでもらえの¹オな¹っかも しらな¹いわね。したども，ルウテルのドイツ語訳聖書（当時の衆方が しかーもか たまげたことに，なんとラテン語でもギリシア語でもないかった。）だの，二葉亭四迷の言文一致だのて 先達が いっばいこと いなる（いなさる）すけ，たまーにわ こんげな言文一致をばやってみた¹てい¹ろと ゆうわけでありますさ。なして新発田弁に言お¹って思¹おかと ゆうと，こ¹オゆうわけですてば。さんざっばら この方言のことばかりし調

(菅谷, p. 2)

- 6-2) おらどこの宝犬子で、だても (だれにだって) 貸さねあんだ。(加治川^{かじかわ}
村金塚^{かなづか}, 136)

格助詞と同じく、副助詞(とりわけ「ワ」)も文の上に出ないことが多い。

1.3. 名詞+接尾語「コイテ・タケテ・ブッテ」など

直喩の「～ミタイニ・～ミテュニ」はすべて用言の意味を限定する副詞句・副詞節になるが、標準語の「～みたいに・～のように」と同じなので、特に採りあげない。なお、連体語は「チョチョズ《よしきり》ミタイダ声ば して やかーましィてば」(ミタイナでもよい。)という語形もとる。

接尾語のついた名詞では、つぎのようなものがよく用いられる。

テンポゴイテ (<テンポ オ コク) 《うそついて》

ノメシゴイテ 《やるべきことをせずに、手をぬいて》

ガ(ッ)ツ・ダケテ (<ガ(ッ)ツ タケル) 《がつかつして、むやみに食べたがって》

アッチャ・ブッテ (アッチャ《兄貴》ブル) 《小ばかにして、あなどって》

§ 2. 体言型形容詞(形容動詞語幹)+ニ

イトシゲニ《かわいらしく》, オーバテニ《ちらかりほうだいに》, ヨッパテニ《もう充分あきるほどに》など、「雪かがーっぽて」§ 3でとりあげた、一種の無変化形容詞【ナ形】に断定の助動詞の連用形「ニ・ネ」(注:アイヌ語「ね ne」《～である; ～になる》)に語形と機能の似ているのがおもしろい。)がついたものと見るか、この「ニ」を助詞と考えるか。学校文法どおりに「形容動詞」というジャンルをみとめれば、その連用形ということになる。

§ 3. 形容詞の連用形

中越方言や中部方言の一部では、本来の形容詞語幹に母音/a/のあるものの連用形がたとえば[暗く>くろう kurau > kuro:]となり、/o/をふくむ[黒く>くろう kurou > kuro:]と区別される。このオ列長音の開合区別は新発田方言にはない。したがって、「暗う」も「黒う」も同じ[kuro, kuro:, kuuro]などになる。「雪かがーっぽて」§ 2の語彙では、連用形(いわば副詞形)の一部分を()入りで示した。

アツツイ・(ツ)《暑い・熱い》→アツツ(ー)なった。

アツチェ・(チョ)《同上》→アツチョ(ー)てかなわなィ。

(5) 「エ(へ)」方向の場所格

母音音素 /e/ は、「エ」の場合、時にイに近く、舌を上げた [e̞] や中舌の [i̞] の音になる。したがって、一律に「イ」と書いてもいいが、本論では「エ」とする。『しばたの昔話』では「え」または「へ」(助詞)と書いている。「雪こざいて あべや」1.1.で述べたとおり、方言(ひいては言語)の表記は音声まる写しにせず、ある程度、話し手の音韻意識を反映する表記法が適切である。つまり、そのほうが読みやすく、わかりやすい。

5-1) 山へ^へ鋤たがいで(持って)行って、そって《(そうして)》、蕨の根っこ掘りに行こう。(小戸, p.105)

5-2) 大きだ川へ、「竜宮の乙姫御様へ、上げますだい。」で《(と言って)》、新発田へ行くたびに《(たびに)》、魚買うできては、上げましたど。(小戸, p.103)

名詞と付属語が音声的に溶け合うことは、鹿児島方言ではつねに起こる現象であるが、越後でも「エ」が前のことばの子音と結び付くことがある。

5-3) 米袋(むすめの名)は、「こうこうださかで《(こういうわけで)》、おれどげ《(私の所へ)》寝にあばしゃい。」で、自分のどげ《(所へ)》、糠袋(姉の名)をば連れできて、寝せでだんだど。^{とらまる}(虎丸, p.193)

「ガ」「オ」と同じく、「ニ」「エ」もまた、表層に現れないことがきわめて多い。

5-4) 新発田へ行って十二単衣の小袖一重ね……、買うできてくれ。(小戸, p.67)

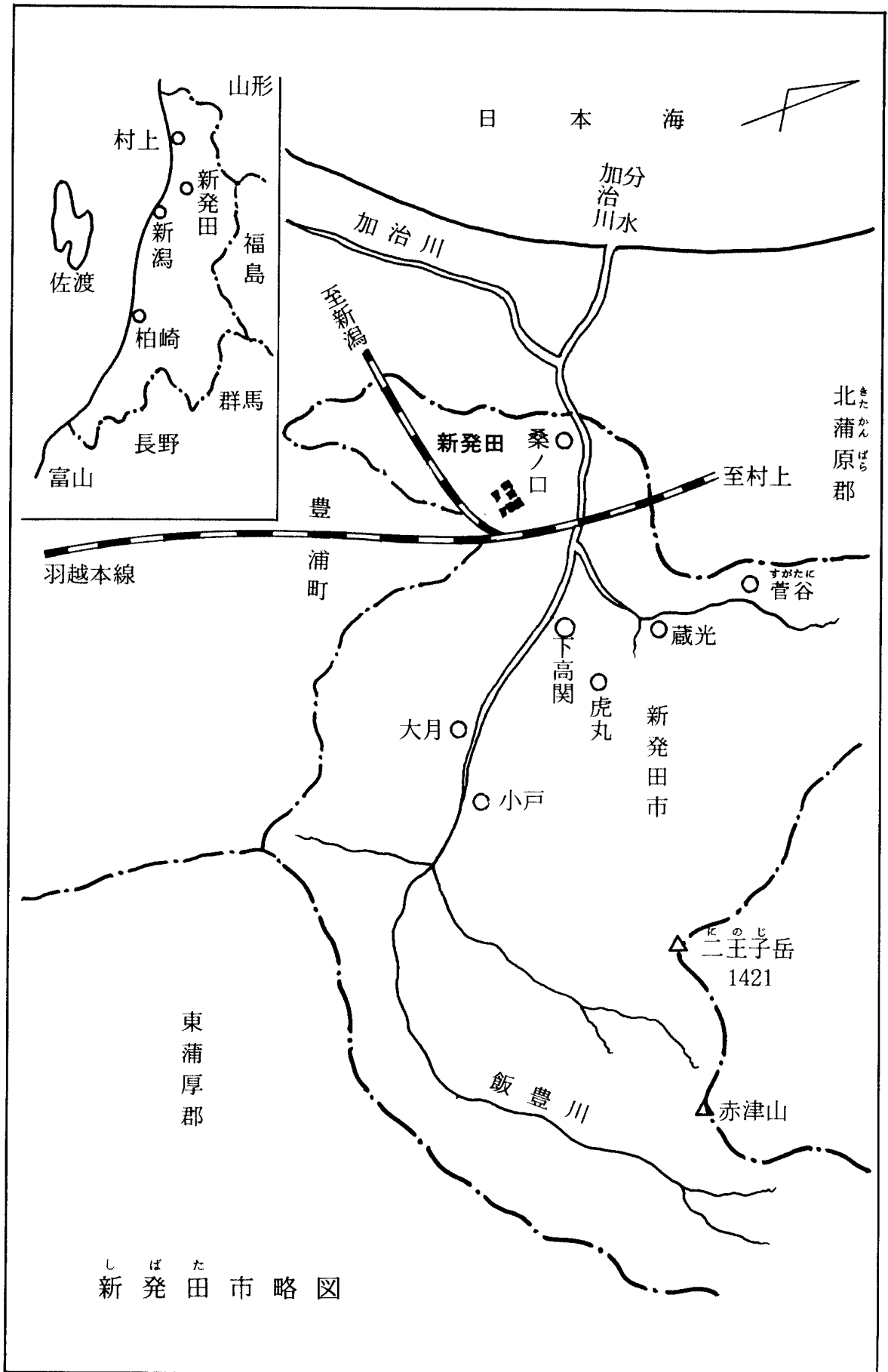
5-5) そしたでば、ポキンと折れて、川中へジャポーンと落ったでがね(落ちたということだよ)。(菅谷, p.3)

1.2. 名詞+副助詞「ワ(は)・デモ・マデ・サエ・カ・コソ・バカシ(ばかり)・バッカ(ばかり)・ダケ・タケ(だけ)など」

おおよそ標準語と同じで、発音だけがちがう。『しばたの昔話』p.66にある「おれがいうことさあ聞いてくれば《(くれれば)》、飯食べっとも。」(小戸, 若月トシさん談)のサ(ァ)は、あるいは副助詞「さえ」かもしれない。北蒲原郡豊浦の天野さんは「サエ」[sai, saə]ぐらいの発音を聞かせてくださったが、重母音になっていて、あとにつづく母音はかすかに聞こえる程度だ。

デモは「ダ(ッ)テモ」(だれでも、だれにも)の形でも使われる。

6-1) 猿に畑ぶってもろて、だっても行がねば、猿あだしにくるろう《(畑をたがやしてもらって、だれも行かなければ、猿が仕返しに来るだろう)》



佐久間惇一編『しばたの昔話』による

らば、「かむィ¹ ふんべ・すま³ ね⁴ かる²⁺⁵。」という。ヤマト語と同じように「かれを²」といった目的語を表層に出さなくてもいいのである。

新発田方言は東北方言の南端の方言としての特色を見せるが、関東・東北とちがい、「ガ」を所有格（連体格）にあまり用いない。しかし、身内や自分たちに親しい所属関係にあるものに対しては、つぎのような表現も見られる。

- 1-2) まっと利口な男だどもで《と思うて》、おれがヲ¹バをば《おれの妹を》
く¹って《くれて》やったが、……（小戸, p.78）

(2) 「ノ」連体修飾語の中の主格

連体修飾語の中の主格は、この方言でも「ガ」と「ノ」、およびゼロ記号で示される。(1)でふれたように、日本語では本来主格はゼロ記号で表されていた。オレガ¹イエ《おれの家》、ア¹ネノ¹ササダ¹ンゴ《嫁さんのささ団子》のガ・ノが、オレガ¹ コォタ¹イエ《私が買った家》、ア¹ネノ¹ ツクッタ¹ ササダンゴ《嫁さんの作ったささ団子》のように主格を表す機能をもつにいたり、やがてほとんどの方言で「ガ」が文の主語を指し示す助詞へ発達した。

- 2-1) これなだ《これなんか》おらどこの宝犬子の授けてくった大事な臼で、
お前なだ貸さんね《貸せない》。（金塚, p.137）

(3) 「オ・オバ・バ」《を》目的格、通里道の場所格

- 3-1) ウナ《おまえ》をば見だで《見たという》者あるてんが、ウナ、お祭り
なんて行がねわな。 （虎丸, p.193）
- 3-2) ゲックきてズミ¹ば飲んだどいす《カエルが来てミミズを飲みこんだので
す》（虎丸, p.205）

(4) 「ニ・ネ」《に、へ、で》位置、方向、目的の場所格

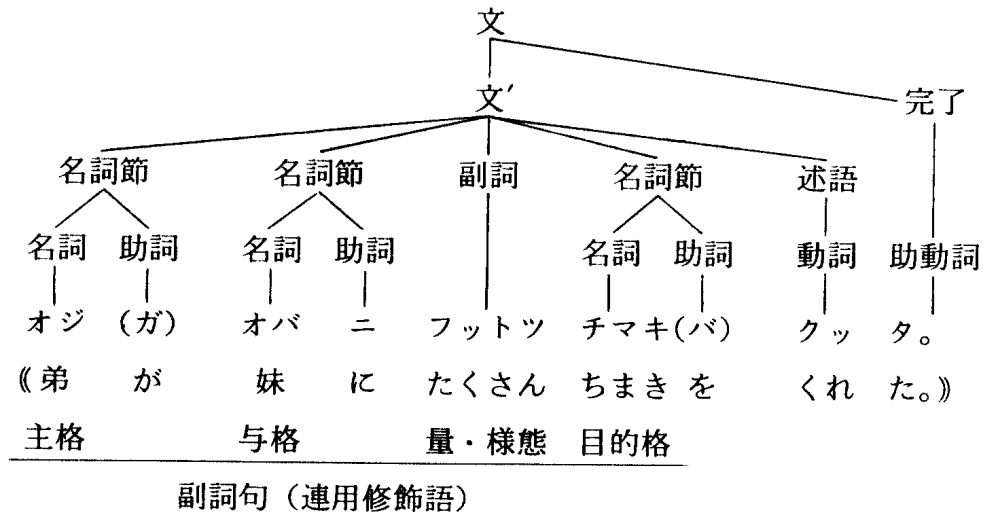
「ネ ne」は「ニ ni~ni」と同じ語と考えられるが、かなりはっきりした「ネ」に発音されることがある。また、存在する位置、停止する位置を示すほかに、標準語では「で」を用いる動作、作業の場所も「ニ」で表すことがある。

- 4-1) ある里¹ね、……鮒取って暮らしている里あったでがねえ《あったそうだ》、
（菅谷, p.41）

つぎの例は《に》と《で（<にて）》のあいだの助詞かもしれない。

- 4-2) むがしあるとごろに、爺と婆が山に暮らしていたで。（桑の口, p.321）
逆に、標準語で「に」となるものが、つぎの例では「デ」になっている。

- 4-3) おら、なんでも知らねんだん《なんにも知らないものだから》、嫁とって
やったが《嫁を取り返してしまっただが》、……（小戸, p.79）



1.1. 名詞+格助詞「ガ・ノ・ニ・ネ(に)・エ(へ)・オ(を)・オバ(を)・バ(を)・カラ・ト」

それぞれの助詞について、今年刊行されたばかりの佐久間惇一編『しばたの昔話』（市立図書館内、新発田市古地図等刊行会）から例文をひろってみよう。文のあとに昔話の語り手の出身地区と『しばたの昔話』のページ数を示す。地図参照のこと。なお、前稿「雪かがーっぽて」, 「雪こざいて あべや」では、新発田方言は語中で有声音化しないという規則に立った表記法を採ったが、『しばたの昔話』からの引用は、語中音の濁音表記をほぼ原文のままにした。佐久間氏の採録された民話は、旧新発田市中心部ではなく、旧菅谷村^{すがたに}、旧川東村^{おと}小戸などの古老の貴重な方言を反映している。

(1) 「ガ」《が》主格, (願いの) 対象格

1-1) 爺さが毎日毎日, 畑行って畑ぶちしていたと。(畑を耕していたそうだと菅谷, p.2)

もちろん標準語同様, 「ガ」は「ウルメ《めだか》ガほしいってば」「おまゑさガすきだがね」のように, 願いや好みの対象語も示す。また, 「ガ」と「オ・オバ」は, 標準語以上に, 文のおもてに持ち出されないことが多い。古語でも「月いでぬ。桂川, 月明きにぞ渡る。」(土佐日記), 「からうた(漢詩), 声あげていひけり。」(同)のように, 主格, 対格はゼロ記号による表示で済んでいた。省略というより, 日本語本来の格表示がこうであったと考えるべきであろう。アイヌ語もやはり, 「あィぬ¹ すシはム² ぽろんの³ うク⁴。」⁽¹⁾ (ひと¹ シシヤモ² おほく³ とる⁴。) という形式で主語や目的語を表す。「神¹ (かれを)² クジラ岩³ に⁴ かへる (する, つくる)⁵。」な

(1) 筆者のアイヌ語表記では, 母音をとみなわない子音をカタカナで示す。

雪 ふ っ と つ

— 新 発 田 方 言 の 副 詞 —

竹 端 瞭 一

本誌に発表した「雪かがーっぽて——新発田方言の形容詞」(1985. 2), 「雪こざいで あべや——新発田方言の動詞」(1986. 3)につづく新潟県北部方言の報告である。はじめ形容詞あるいは動詞とともに記述する予定であったが, どちらもそれだけで「ふっつつ」《たくさん, いっぱい》になり, 独立させることになった。

§ 1. 名詞と付属語・接尾語の結合

同郷人どうしの, うちとけた話しことばが資料の中心をしめる方言の記述では, 標準語以上に品詞と品詞のさかいが確定しにくい。「雪かがーっぽて」において, いわゆる形容詞(新発田方言では「^{しばた}ーィ」でおわる)のほかに, 体言型の形容詞として, いわゆる形容動詞(新発田では連体形に「イトーシゲ・ダヤヤ《かわいい あかんぼう》」とダまたはナがつづく)|ばかりか, 形容詞性の強い「ショッターレ《だらしのない者・見苦しい者》といった体言そのものも, 形容詞とならべて記述した。ショッターレダコトとかナーンギニナッタ《つかれた》などは, 名詞でもあり, 形容(動)詞でもある。

ここでもまず, 名詞になにかがつづく形で文の中の副詞句, すなわち連用修飾語となる場合を取り上げたい。副詞の位置を P-marker (句構造標識)で示すと, つぎのような位置に名詞句・名詞節とならぶ場合もあり, 「ホンニ」《本当に》, 「ヤッパ」《やはり》のように文全体に直接かかる場合もある。名詞と助詞の組については, 本稿でなく, 将来「新発田方言の名詞」と題するはずの続編で述べるべきであろうが, 文法的なはたらきの面から見て, 副詞とともに採りあげることにした。